

わんりい

184号

2013/6/1

日中文化交流市民サークル「わんりい」

東京都町田市能ヶ谷7-32-12 田井方

〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100

<http://wanli-san.com/>

Eメール: wanli@jcom.home.ne.jp

◆「わんりい」HPのアドレスが上記になりました。



「豪華な民族衣装を着服している少女」(2009年8月中旬・四川省甘孜チベット族自治州理塘県・標高4000m)
カムを代表する街理塘(標高4,044m)では、毎年8月1日から1週間ほど競馬祭を行う。競馬祭の規模はチベット一大きいといわれる。祭りの間、競馬以外、ファッションショーや舞踊、跳神(チベット宗教劇)などもある。理塘はまた民族服飾も豪華で特色があり、カム地方のファッションをリードしているファッションショーの際、民族衣装に瑪瑙、珊瑚、宝石、金銀製品などあっただけのアクセサリーを身に付け、美しさと華やかさを競う。
(撮影者 烏里烏沙 ウリウサ チベットカム山岳研究会 NPO法人 チベット高原初等教育・建設基金会 ゲーサンメド・理事長)

北京は、バス路線が発達しています。最近では地下鉄が増えて、随分便利になりましたけれど、以前は地下鉄が少なく、市内の移動はバスが頼りでした。バスの路線は数字の後ろに「路」をつけて示します。バスの運営は北京市のようですが、数字を幾つかのブロックに分けて、別々の管理事務所を置いているようです。数字の前に特の字をつけて「特〇路」と言うのがあったり、「運通〇〇」と言う路線があったりもします。

利用者から見ると、それぞれのグループはそれぞれに特色があります。一番の特色は、「特〇路」のバスは2階建バスなので遠くからでも分かります。また「運通〇〇」のバスは、黄色で車体が少し小ぶりなのでこれもすぐに分かります。但しそれぞれの番号は近くに来てから良く確かめないとイケません。

数字の路線は、グループによって2連結の車が多かったり、空調車を走らせていたり、車体の色も少し違うようなのですが、車体に広告を描いて走っているのが多いので、遠くからは見分けられません。でも、乗車してみると、グループ毎に、車内の雰囲気や少し違うのを感じます。以前、車掌さんが乗っているときは、車掌さんの勤務態度が違いました。まめに声を掛けて切符を売る車掌さんと、自分からは声を出さずにぶすっと座っている車掌さんと、車掌さんの個性と言ってしまうとそれまでですが、どちらの車掌さんが多いかは、路線グループによって違いました。車掌さんがいない今では、運転手さんの運転の仕方に特色が出ているといえるかもしれません。

北京市内にはバス停があちこちにありますが、どこも少なくとも3、4路線のバスが停まります。一つ路線しか停まらないバス停は、よほど郊外に行かないと見られないでしょう。バス停には、そこに停まる路線バスの番号と、其の路線の停留所名が全部書いてあります。日本では、路線の停留所名を全部書いてあることはまれですが、北京の場合は、路線の始点から終点まで全部書いてあり、この停留所を赤で示し、バスがどの方向に行くかも矢印で示してあります。行きたい停留所名が分かっているならば、〇番路に乗って

幾つ目で降りれば良いか確かめられるので安心です。反対方向に乗ってしまう心配もありません。

その代わり時刻表のようなものは一切ありません。ある時、バス停で811路バスを待っていたのですが、20分経っても25分経ってもバスは来ませんでした。いい加減諦めかけた時、お目当てのバスがやって来ました。遅れたせいか、そのせいで遅れたのか、バスは酷く混んでいました。乗れるかどうか心配していると、後ろから同じ811路バスがやって来ました。前の程混んでいないように見えたので、後ろのバスに乗ろうと決めて、停まっているバスに乗るのをやめて待っていると、何と、後ろのバスはこの停留所に停まらずに、停まっているバスを追い抜いて行ってしまったのです。

結局次のバスまで、更に10分近く待ち、やっと乗ることが出来ました。どうも北京のバスは運行ダイヤに管理されてはおらず、かなり自由に走っているように見受けられました。

もう一つ気をつけなければいけないのは、前にも書きましたが、停留所名が同じでも停まる場所が離れていたり、時によってはブロックの反対側にあたりするので、見知らぬ土地へバス停からの道順を頼りに行くときは要注意です。必ず路線名を確かめて、「〇〇路の◇◇停留所」と言われた路線に乗らなくてはなりません。

バスに乗っていても、早くから次の停留所で降りると運転手さんに分からせないと降り損ないです。北京で生まれ育った友人でさえ、一度降り損ないました。其の時は、他にも降りる人がいたので停まったのですが、日本の生活が長かった友人は、一拍遅れて、前の人にすぐ続いて降りなかったら、運転手はすぐドアを閉めて発車してしまいました。友人は抗議したのですが、運転手さんが車を停めないで降りられず、結局次の停留所まで連れて行かれてしまいました。

北京のバスもどんどん良くなっていますが、去年乗ってみたところでは、「次、降ります」という意思表示をするボタンはまだ設置されていないようでした。早めに運転手席の近くまで行って、次に降りる予定だということを知ってもらう必要があるようです。

私の調べた諺・慣用句 20
治において乱を忘れず

三澤 統

人間誰でもものごとが旨く
いっている時には、浮かれてしま
い喜んでばかりいてその時
点ではなかなか先の備えまで
気がまわらないものです。その
ようなことは結構多いらしく、
そのことを戒めた諺がいくつか
あります。

例えば

“勝って兜の緒を締めよ”

“備えあれば患い(憂え)無し”

“治において乱を忘れず”

などです。

今回はその中で“治におい

て乱を忘れず”をとりあげることとしました。

辞書にはそれぞれ次のように載っています。

▲小学館 デジタル大辞泉：

「治において乱を忘れず 太平の世にも戦乱の
時を忘れず、準備を怠らない」

▲小学館 中日辞典：

「居安思危 jū ān sī wēi 治に居て乱を忘れ
ず。平和なときも困難や危険に備えて準備を
怠らない」

この成語の由来は「左伝注¹⁾、襄公十一年」
です。



或る年、宋国、斎国、晋国、衛国などの十二国
連合が、鄭国に進撃を開始しました。鄭国は非常
に恐れて、直ちに十二国の中で最も強大な晋国に
和を求めました。晋国は求めに同意して、鄭国の
和の要求を受け入れました。残りの十一国も晋国
が戦いを止めるならと、皆進撃を停止しました。

晋国の対応に感謝するために、鄭国から晋国に
さまざまな贈り物が届きました。沢山の戦車、楽
器、そして楽士や女演歌師たちです。

晋の悼公²⁾は非常に喜びました。そこで功績の

あった大臣の魏絳に報いるために、贈り物の中か
ら望むものを授けようと言い、さらに彼に次のよ
うに言いました。

「この何年か貴公は誠心誠意私のために協力し
てくれた。おかげで晋国のさまざまな困難な事柄
も大変首尾よく進めることができた。貴公や皆と
も一緒に大いに喜びを享受しようではないか」

ところが魏絳はその提案には応ぜず却って悼
公に次のように言いました。

「今は、陛下は多くの国家と団結し、統率が出
来ています。このことは陛下の技量であり、また
各大臣が心を合わせて協力した結果です。私など
は大した功績も打ち立てておりませんし、功なく
してどうして禄を頂くことができましょうか。そ
こで陛下にお願いがあります。国家が安泰な状況
でいられるときにこそ、これから先の事柄に思い
をはせていただきたいのです。世間で言われてお
ります“安定しているときこそ、危険が発生す
る可能性を考えておくべきだ”と。そのようにし
てこそ、事が起きるより先に準備ができると思
うのです。準備があれば失敗や災禍を避けること
ができるものと存じます」

魏絳の言葉に悼公は改めて気持ちを引き締め
ました。

〈注記〉

1) 左伝

「春秋」の解説書。戦国時代に左丘明によって作成さ
れたといわれ、三十巻からなる。正式名は「春秋左氏
伝」といい、通称を「左伝」、「左氏伝」という。

(インターネット「コトバンク」より)

2) 悼公

悼公(紀元前587年～紀元前559年)は、中国
春秋時代の晋の君主(在位：紀元前573年～紀元
前559年)。襄公の曾孫(父は恵伯談)にあたり、
即位する前まで周の王都で学問を積んでいたこと
から周子、または孫周と呼ばれた。

(ウィキペディアより)

張委たちが立ち去った後、隣人たちが秋先を困んで慰めていましたが暫くするとみんなも帰りました。秋先はただ一人、めちゃくちゃにされた庭を片付け始めました。片付けながらも目の前の、無残な植物の様子を見て、また悲しみがこみ上げて我慢できなくなりました。涙がぼろぼろ落ちてくると声をあげて泣き始めました。

とその時、後ろから女性の声が聞こえてきました。「何でそんなに悲しんでいますか？」

秋先はびっくりして振り返りますと、一人の美しい女性が立っています。

「え？ どちら様でしょうか？ どちら様のお家のお嬢さんでいらっしゃいますか？」

「私は近くに住んでおります。秋先さんの庭は、ボタンがちょうど見頃だと伺いましたので参りました」

秋先は『ボタン』という言葉聞いて、また悲しみをこみ上げて、思わず涙が溢れました。

「ご覧ください。この庭はボタンばかりか今は、何もなくなってしまいました」

秋先は両目から涙を溢れさせながら言いました。

「一体どういうことなのでしょう？ 教えて頂けませんか？」

と女性は優しく訊きました。秋先は事の一部始終を女性に話しました。女性は聞き終わると言いました。

「こんな悪行をするようでは、張委はきっとその報いを受けるでしょう。それよりも早く庭を綺麗に片付けて花を再び咲かせましょう」

秋先は首をつよく横に振りました。

「もう駄目だよ。折られた花、踏みにじられた花は今年はまだ終わりじゃ！」

「心配しないでください。私は花に元気を与えたり、綺麗に咲かせたりする家伝の秘策を知っているのです。と一緒にやって見ませんか？」

「え、それは本当なのか？ こんなに哀れな姿になった花をもう一度前と同じように咲かせることができるというのかね？」

「やって見ないとわかりませんが。とりあえずは秘策を施して見ましょう」

と、女性は腰を屈めると倒れた花を立て直し、叩き落された花を拾い集め始めました。秋先もそのあとついて、一緒に片付けながら半信半疑の口調で訊きました。

「もし、お嬢さんが本当にこの可哀想な花たちを救うことができればこの上もない感激です。わしは何も報いることが出来ませんが、今後お嬢さんが来られた時はいつでも花を見て頂きましょう」

「まあ、それはありがたい事ですね。では、花に水を掛けてあげなければなりませんので、水を運んで貰えませんか？」

と、女性は頼みました。

「はい、少々お待ち頂ければすぐ運んできましょう」

秋先は言うと、水を汲みに行きました。

暫くして秋先が戻って来ましたが、目の前の景色に大変吃驚しました。先程折れたり倒れたりした花々や、植物は既にびんと立て直されて、花も色鮮やかに綺麗に咲いて、地面に投げ捨てられた植物の残骸もすっかり消えてしまい、まるで何事も起らなかったかの様子です。

秋先は呆然として目の前の庭を見ていましたが暫くして我に返りあたりを見回して女性を捜しました。しかし、さっきの女性の姿はどこにもありませんでした。

もう帰ってしまったのかと思った秋先が玄関まで行ってみましたが、やはり女性の姿はありません。隣人たちに尋ね歩いても、誰も秋先が話すような女性を見かけていませんでした。

秋先は興奮して先程の不思議な出来事を皆に話しました。皆も秋先が語る話を奇妙に思いましたが、「花を命ほどに大事にしている秋先を神様が知り感動されて助けにきたに違いない」と言い合いました。そして秋先の庭を見た皆はこの不思議な事実を村中に伝えました。話を聞いた村の人々は皆、不思議に思って秋先の庭にやって来て、神様に修復された庭

を見学しました。

そんな村人たちの姿を見た秋先は一人で花を楽しむよりも大勢の人々と一緒に楽しむ方が幸せなことに気付きました。秋先は、以前の自分を反省し、庭の玄関を大きく開いて、村の人々を迎え入れて、皆に思う存分庭の景色を觀賞して貰いました。そして秋先は皆の笑顔を見、秋先の庭の花々を褒める言葉を聞き、とても幸せな気持ちになるのでした。

ところで、張委は家に帰ってからずっと秋先の庭の事を考えていました。そして翌朝、家のもの達に言いました。

「昨日はあの爺めに怒鳴られ、どうしても腹に据えかねる。今日は必ずあの庭を手に入れる。もし俺に譲らないなら庭をめちゃくちゃにしてやろう」

張委は再び、ならず者の一行を連れて秋先の庭に向かいましたが、その途中の道ばたで人々が話して

いる会話が耳に入りました。

「ねえ、お前さまも聞いたかね？秋先の庭は神様が守っているっていうじゃないか」

「そうだね。ならず者たちに乱暴された庭が間もなく元通りになって、花は前よりも綺麗だそうだよ。」

「真面目に頑張れば必ずいい報いがあるってことだね」

張委達は最初は冗談話だろうと思いましたが立ち止まってよく聞いてみると、いかにも真実に違いのない話だと感じられ、急いで秋先の庭に行ってみると、庭はこれまでと違って、玄関から人々が出たり入ったりしているし、庭の中もとても賑やかでした。張委たちが急いで秋先の庭に入ると、信じられない光景が広がっていました。昨日自分たちによって乱暴された植物が元気に甦り、花も鮮やかに咲いて、まるで何事もなかったかのようでした。（続く）

智子の雑記帳 93

五月病になりました

久しぶりに、五月病になっている。社会人12年目になって、いまさら五月病である。

4月に異動になった。前の部署は、人と関わることが多く、色々な人と出会えて楽しかった。新しい部署にきて1ヶ月半。社外の人と関わる機会も少なく、業務量ばかり多く、すっかり気分は減入っている。

ちょうど10年前に、やはり五月病になった。社会人2年目である。五月病は長引き、8月に会社を辞めた。溜まっていた有給を一度にとり、中国シルクロードのツアーに申し込んで、出かけた。カシュガルの真っ暗な夜に見上げたミルクウェイが、胸に迫った。わずか1年半で会社を辞めることの後ろめたさや不安が一気に押し寄せてきて、いつかちゃんとした大人になりたいと思った。

それから10年、仕事は誠実にこなしてきた。それが、ここにきての五月病である。35歳目前にして周囲を見ると、キャリア志向の友人は役職への階段を着実に上っており、家庭を持っている

友人はきちんと子育てをしている。自分だけが、非正規労働を選んだまま、キャリアもなく、出産もせず、宙ぶらりんでいるような気がして、ならない。

インターネットで「五月病」を検索してみると、新しい環境から来るストレスから、無気力感、不安感、焦りが生じる精神的な状態のことを言うらしい。いろいろなサイトを見ていると、どうも「頑張らなきゃ！」という思いがある人ほど、慣れない環境で空回りして、「五月病」になるようだ。

そう、私は「五月病」なのだ。ある程度、失敗や、無気力感・不安感は仕方がない、しばらくは頑張らなくていい、と腹をくくってみた。職場で、ランチを食べながら「私、どうも五月病で…」とカミングアウトもしてみる。「私も、去年の同じ時期、そうだった」と、昨年、異動した同僚から返ってきた。自分だけじゃない。しばらく無理しないでやってみよう。夏はそのうちやってくる。

（真中智子）

車を解放南路沿いに置き、Z社長や友人たちと周囲の街並みを眺めながら、魯迅中路の方に左折する。「さすがに魯迅の生まれ故郷だけあって」と言いたいところであるが大連市にも解放路とか魯迅路という大通りがあり、大都市にはだいたいこれらの名前の付いた道路がある。中国政府は、中山路とともに大好きな名前なのであろう。自国の有名人にとどまらず大連市には、高爾基(ゴーリキー)路なんて大通りもある。

さて、紹興市はやはりいいところだなと思いながら歩いていると、なにやら臭いにおいが漂ってきた。そのうち強い臭気が変わってきた。Z社長が「休息一会儿(ちょっと一休みしよう)」と言ってテーブルを指さしながら店の中に入っていった。皆で座って待っていると、お皿に盛った厚揚げのようなものを店員が持ってきた。社長は、「これはここの名物です。召し上がってください」とニコニコしながら中国語で話しかけてきた。においを嗅ぐと鼻が曲がりそうな強烈なおいだ。

折角だからと勇気を振り絞って一口食べたが、二度と口にすまいと思った。これでは、クサヤも顔負けである。友人になんという食べ物か聞くと、「臭豆腐(チョウドーフ)」で中国では、有名な食べ物だというのである。私はここで初めて経験したが、確かに臭豆腐は旅行先でときどきお目にかかった。しかし以降、口にしていない。

帰国してネットで見ると、豆腐を発酵させた汁に漬け込んだものだという。保存食であろう。古来、湖南省の風土食が中国各地に伝播し、台湾にも外省人が持ち込んだものだそうだが台湾の臭豆腐も有名ならしい。

この店は早々に切り上げてまた歩き始めた。すると前方の看板が見えてきた。どこかで目にした文字である。その看板の文字は〈咸亨酒店〉である。そう、魯迅(1881年～1936年)の作品“孔乙己”の中に出てくる酒屋の名前だった、と思い出した。この作品を読んだのはずっと昔のことだが、なぜかこのお店の名前は頭の片隅にあった。みすぼら

しい身なりの孔乙己がふらっと出てきそうな雰囲気である。この看板を見てようやく魯迅の生まれ故郷に足を踏み入れた気がした。お酒や臭豆腐そして茴香豆など売っていたような気がするが、はっきりした記憶はない。なにしろこの日は国慶節の連休中で、観光客であふれかえり何かを買う気が起こらなかったからである。

まもなく「魯迅記念館」が見えてきた。この記念館は、「魯迅故居」、「三味書屋」(通っていた塾)、「陳列館」からなっている。魯迅故居は当時の様子がそのまま残されているようだ。平屋であるがなかなか立派な構えである。入り口は重厚な造りで、すこし威圧感を与えている。開放的な造りではない。間口はさほど広くはないが、奥行きはたっぷりである。実は、魯迅は富裕な地主だった「周家」の長男として育った。ご存知のとおり彼の本名は、周樹人で、ペンネームの魯迅の魯は母方の姓である。祖父は科挙における進士の称号も得ており、彼は将来の高級官僚が約束されていたようなものであったが、ある事件を境に周家は坂道を転がるように没落していく。この時の周囲の人たちの手のひらを返したような薄情さが幼少期の彼の人格形成に大きな影響を与え、作家としての原体験になったと思われる。

魯迅記念館周辺は、このあたりの一大観光スポットで土産物店やいくつかのレストランがあって人でごった返している。友人があれをやってもらおうよ、と指さす方を見ると陶芸店が観光客の写真を撮ってそれをマグカップに焼き付けている。見本をみると魯迅の大きな似顔絵が描いてある壁の前で撮った観光客の写真が焼き付けてある。それには撮影年月日、と「中国歴史文化名城・紹興」、「一輩子」、「一杯子」という赤色の文字まで入っている。これはいい記念になるなとすぐ列の最後に並んだ。〈紹興での一生の記念となるコップ〉ということか。写真を撮って15分くらいでできあがったが、値段はいくらだったか忘れてしまった。今は大切に本箱の中に置いて眺めている。

ここで魯迅の55年間の短い人生の中で日本と

の関わりを中心に振り返ってみたい。彼は16歳までここ紹興で過ごした。その後、南京、北京、杭州、広東、上海など各地に足跡を残している。また1902年(21歳)に官費留学生として日本に渡航した。1909年まで7年間も日本に滞在したのであるが、この間の彼を取り巻く状況や日本や中国の置かれた環境を見てみよう。

彼はまず弘文学院で日本語の勉強から始めた。そして1904年に仙台医学専門学校(後の東北大学医学部)に入学した。当初は医学の道を目指したのだ。きっかけは優しかった父が重い病気になった時である。漢方医らのあやふやな治療で父が死亡したのである。漢方医と当時の中国の医学に不信を抱き、西洋医学を志したのである。この仙台で、彼は恩師と崇めることになる藤野巖九郎先生と出会う。藤野は日本語がまだ不自由な魯迅に対し、講義のノートの提出を求め、その都度きめ細かく添削するなど何くれとなく彼を支えた。小説「藤野先生」に詳しいが、先生のことを「わが師と仰ぐ人の中で、先生は最も私を感激させ、最も私を励ましてくれたひとりだ」と言っている。

「藤野先生」については私が大連勤務の際、週一回中国語教室に通っていた時、ある先生(大連外国語学院の学生)がこの小説の中国語版の資料を教材として用意して、数回勉強したことを懐かしく思い出す。その資料を見ると、メガネを掛け立派な口ひげを蓄えた藤野先生の写真や仙台医学専門学校の有名な階段教室、自筆の入学願書などの写真が掲載されている。この資料は、「魯迅経典全集」からのコピーであったが、どのくらいの中国人が読んでいるのだろうか、と思った。藤野先生のような日本人がいたということは私の心をホッとさせた。彼は医学者としてではなく、文学者として有名となったがそれは次のようなきっかけがあったからである。

魯迅は授業の中で、幻灯機で戦争に関するニュース映画を見るときがあった。それはロシア軍のスパイであった中国人が捕えられ、銃殺されるシーンであるがそれを見て喝采する同胞の姿を見て、中国人

を救うのは医者ではなく、文学による精神の改造しかないとの危機感を持ったということである。そのため1906年1月には退学し、文学で中国人の精神を覚醒させようとした。退学後一度帰国し、母の決めた女性と結婚し、次弟の周作人と共にふたたび日本に戻った。したがって仙台での生活は1年半弱で終わったわけであるが、この時期に前号で書いたように秋瑾も1904年に日本に留学し、二人は東京で顔を合わせている。しかし翌年中国に戻った秋瑾は密告されて捕えられ1907年に処刑された。勿



魯迅



魯迅故居



室内

論彼は来日してから、母国の封建社会や清朝の卑屈な対外政策などに憤慨し、革命団体「光復会」の会員にもなり漢民族の復興のための諸活動も行って

いる。同時期に国(清朝)が、東方の小国と思っていた日本に日清戦争で敗れ、さらに1904年～05年の日露戦争では、自国の領土で関係のない他の国と国とが戦争をするという二重の屈辱も味わっている。日本での7年間は国も彼自身の周りも大きなうねりの中に置かれた。

1909年に帰国後文学革命、思想革命に先導的な役割を果たすべく活動を開始した。2年後に辛亥革命は起きて新しい世が到来すると思ったが、革命後の旧態依然たる現実に幻滅、思索を深める長い日々が続いた。それが中国人の本質を語る彼の代表的な作品を生む原動力ともなった。

1918年(37歳)には「狂人日記」を執筆、1921年(40歳)には「阿Q正伝」を発表した。ドイツ語も学び、古今東西の文化や文学にも通じ、東欧の文学の紹介もするなど鬼神のごとく働き、中国人の精神的覚醒に多大な貢献をしたのである。中国人が孫文とともに魯迅を尊敬するのはよくわかる。残念なのは55年という短い生涯であったことだ。

彼は、1927年(46歳)に上海に移り住み、ここで生涯を終えた。上海には立派な魯迅記念館があり、多くの方が彼の一生を偲んでいる。

さて紹興市に深く関わりのある偉人の紹介の最後となるが、「周恩来」を忘れるわけにはいかない。周恩来(1898年～1976年)は江蘇省の淮安市に生まれた。しかし、周家はもともと紹興市を祖籍とする旧家で祖父の代に淮安市に移っている。もしかしたら魯迅の周家とは遠い親戚かなと思った

りした。紹興市内には、地図を見れば魯迅記念館から北の

方角に「周恩来故居」が記載されている。いつ頃住んでいたのであろうか。彼の功績などは皆さんの方がご存知と思うので、ここでは周恩来の考え方、信念

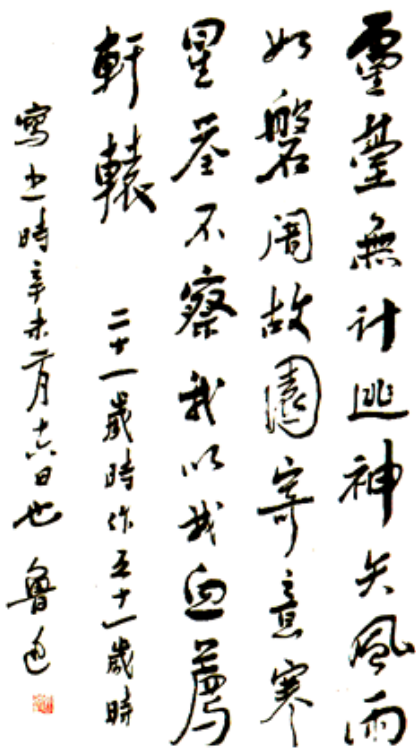
がわかる出来事を一つだけ書いて紹介にかえたい。

今年の3月頃、「星火方正」(方正友好交流の会・出版)という冊子を読む機会があった。方正は“ほうまさ”と読むが、これは宝清県という地名があり区別するため、このように読むことにしたそう。ハルピンの東に方正県はあるが、ここに日本人墓地がある。1945年ソ連が日ソ不可侵条約を一方向的に破棄し、この地域に侵攻した。その時にソ連軍の犠牲になった旧満州開拓団の方々約5000人の墓地である。この地方に住んでいた中国人の農民からすれば、自分たちの土地を横取りしたのだから自業自得と思っても仕方ないことであろうが、農民たちは開拓

民が寒さと飢えで次々と死者が出る中でまだ息のある者を各自の家に引き取り多くの命を助けている。その後周恩来総理は方正県政府に指示し、「方正地区日本人公墓」を造らせた。又、文化大革命の折に公墓が破壊されそうになったときには、「彼らも日本軍国主義の犠牲者であり、破壊してはならぬ」と止めさせたそう。よほど肝が据わった人でなければとも言えぬことである。このことを日本人は決して忘れてはならぬと思う。いつか機会があればこの地を訪問したい。

これまで紹興市が故郷の人や、縁の深い人を5人書いてきたが、魯迅の弟の周作人や政治家で教育家として有名な蔡元培は紹興の人であり、まだまだ紹介したい人は多い。彼らに共通するのは国を思う強い信念と行動力である。一般的には気候温暖で豊穡なところにはこのような人物はあまり出てこないのではないと思うが如何であろうか。私の偏見かもしれないな、と思いつつ紹興市の稿を終わりとしたい。

(おわり)



魯迅の書



月日の経つのは本当に早いですよね。こちらに来てから、もう三ヶ月経ってしまいました。この間にまた色々な交流と体験が出来ました。

6月25日、一日研修に同行しました。朝8時にバスで出発、約2時間で五所川原市立佞武多(たちねぶた)会館に到着しました。まず、エレベーターで4階へ。すると、回転しながらの膨大な武者が目の前に現れました。これこそ有名な立佞武多でしょう。想像以上に大きく、驚きました。

その後、観覧者の流れに従って、製作所に入りました。

そこではねぶたの製作作業が行われていました。作業員たちが骨組みの出来た物に紙貼り、墨入れ、蟬入れ、色付けなどをしていました。数人の人が色付けの体験もしました。昔、このような巨大なねぶたは、当時の豪商、大地主の象徴とされ、中国の三国志や水滸伝などの武者もあったそうです。これで、中国文化が日本の広い分野に影響があるということが改めて分かりました。このねぶたの会館の見学を通じて、ねぶたの歴史、作成などがよく分かりました。

私が始めて青森に来た時、電車の中で県庁の人から「青森ではねぶたが有名」と聞き、最初私は、ねぶたとは名物料理だと思っていました。皆さんに笑われるのですが、中国では子豚の丸焼きが名物料理の一つなので、どうも言葉では近いと感じました。

ねぶたの会館を出て、六戸に戻るバスの中で、会長の紹介で私は中国講座を行いました。最初に私はホテルの浴場の入り口の簾に書いている男湯、女湯について説明しました。

中国語ではお湯はスープのこと、つまり男湯と女湯とは男のスープ、女のスープという意味になります。皆が興味津々に聞いていました。後は質問に回答するという形で、中国の気候、南北風俗、体育、経



済について説明しました。久しぶりのガイドの気分で山西省国際旅行社の仕事を懐かしくなりました。最後に、会長が「鄧仁有の特別講座も聞けたし、本当に有意義な一日でした」と、ユーモラスなご挨拶をし、皆が笑いました。

7月3日、東部上北教育研究協議会の先生の案内で、十和田中学校剣道場を見学しました。最初、剣道部に入りますと、「歓迎 鄧仁有」との大きい看板が見え、私は恥ずかしかったです。挨拶の後、学生たちに囲まれ、中国の名物とか、三峡下りとか、赤兎馬とか、楽山大仏など各方面の事について質問され、一つ一つ答えました。それから数字の一から十までを中国語の発音と片手での表し方を教えました。皆よく出来ました。

学生たちとの交流が終わって、先生の説明を聞きながら、皆さんの剣道の試合を見物しました。大声での叫び、力強い格闘、敬虔な教え乞い、正しい礼儀、とても印象深く感動しました。剣道の見学は今回が初めてで、とても勉強になりました。

これからも交流を深めたいと思います。どうぞ、宜しくお願いします。

(注) 五所川原市立佞武多：青森県五所川原市で8月8日に開催される祭り。青森市のねぶたと構造は基本的には同じだが、その名の通り、高さが最大で20メートル強にも達する巨大な山車が運行される。

(本文も注も原文のまま)

「鄧さん頑張る・日本探検記」は、2004年から2006年の2年間、青森県六戸町の国際交流員として国際友好活動にかかわった、中国山西省太原市に住む一中国人・鄧仁有さんの日本体験です。

台湾登山ツアー体験③ 向陽山の山小屋へ

佐々木 健之

◆『向陽山屋』の様子

ガイドは休憩時間で昼食を食べましょうという。昼食といっても、バスの中で渡された菓子パンである。前夜台北を出たとき、バスの床に黒い大きなビニー

ル包みがあり、何だろうと思った。それがY社が台北のパン屋で仕入れた「昼食」であった。本来は、行動中に食べるモノだが、私はバスの中で小腹が空いて全部食べてしまった。蒸しパンのようなパンが3つと、初めて見る台湾製のスポーツ飲料が1人分だ。バスで食べ始めたときは、腹を満たすのが目的だったが、2つめのパンからは、持ち歩いて荷物にするのがイヤなので、少し無理をして腹に収めてし

まった。3つめはノドに詰まるパンをスポーツ飲料で無理矢理流し込んだ。だから、休憩中に皆がパンを食べているときは、持参したチョコレートを食べた。

昼食休憩のあと再び登り始めた。30分に一度くらい休みをとりながら進んだ。あたりは「台湾二葉松」という針葉樹の森になり、奥秩父のような雰囲気

いだ。

とうとう小雨が降ってきた。薄暗い巨木の下を黙々と歩いてから、大石がごろごろした坂を登ると、今夜の宿「向陽山屋」があった。15：45到着。有り難い

ことに改修工事が完成したばかりで、材木が真新しく綺麗だ。

ネット経由で貰った「登山日程表」によれば「テントにて、寝袋をご利用頂いての宿泊となります」と書いてあったので、テント泊を覚悟したが、改修工事完了となったので山小屋が使えたのだろう。山小屋泊とテント泊とでは持ってくる装備や、居住性が違う。雨に降られたときは断然山小屋の方がよい。情報を更新しないのは、窓口の



向陽山小屋から、三叉山→嘉明湖→向陽山(往復)と歩いた。2：30出発。帰り着いたのは16：30。

旅行社と催行会社のY社とも認識不足だ。

2階建ての山小屋はかなり広く、コンクリートのH字型通路の左右に2段ベッドが組み込まれていた。室内は非常灯程度の照明のみで、昼でもうす暗い。壁に貼った見取り図によると1階が60人、2階が20人の合計80人が定員となっている。

トイレは山小屋でよくある別棟で、個室が4つ。こちら水洗式で清潔だった。夜間用に太陽電池の照明が通路の足下を照らすようになっており、懐中電灯無しでもトイレが使える。

台湾の山小屋は公営の無人小屋がほとんどで、日本のように一泊二食付で客を取る民間の山小屋はない。だから、普通は登山者自身が食料と寝具を担ぎ上げなければならない。けれどもY社のようなツアー登山に入れば食事と寝具付は担がなくても良い。自分で荷物を運ぶことを考えればこれは楽である。

室内に入ると直ぐに、ガイドが名簿をヘッドランプで照合しながら、それぞれの寝床を指定した。私は「ソ



小雨の中、向陽山小屋に到着



向陽山小屋の中の二段ベッド。柱から柱で、個人の縄張りを区切ってある。



向陽山小屋夜明け前。日本の山小屋との違いは、降雪で潰されることがないので、広く大きな屋根がとれる。

ゾム(佐佐木?)と自信なげに呼ばれた(漢語圏からすれば変な名前なのだろう)。日本人7人は入り口に近い下段をあてがわれた。下段の方が出入りが楽なので、一応年齢を配慮したのだろう。端がFさん、隣に私そしてツレアイ、奥に大阪の4人が並んだ。

1人分の占有領地境界は柱から柱で仕切られていて分かりやすい。おおよそタタミ1枚分が占有領地である。床には厚さ5cmもあろうかと思う薄緑色のウレタン(または、のようなもの)が専有面積一杯に、はめ込んであった。これは断熱材と寝床のマットを兼ねている。

山小屋は我々のグループだけではなく寝床に荷物だけの不在者寝床もあった。荷物の持ち主は、夕方になって山から濡れた雨具をまとめて帰ってきた。

◆箸を忘れる

まもなく夕食となるが、ツレアイは迂闊なことに、箸を入れたポット保温袋をポットごと不要な荷物と

して、バスの中に置いてきてしまった。登山中の状況からお湯をもらうことはできないだろうと決め込み、荷物になるので持ってこなかったのだ。しかし観察したところ、頻繁に湯を沸かすので、お湯を貰うことはできたと思う。飲み水は「開水(カイスイ)」、お湯は「熱開水(ルーカイスイ)」と言っていた。

箸がないと、汁ものや温かいものは食べられない。私は予備の箸くらい、ガイドが持っているだろうと安易に考えた。紙に「我忘…」と書いて見せれば解るだろう。しかし「箸」の中国名は…。

私が初めて中国観光に行ったとき、フォークでは食べにくかったので、ホテルの食堂で「箸」と書いて給仕に渡した。だが首をひねるばかりで「箸」は通じなかった。だから「箸」ではないことは知っていた。「快」に何か付いた字であったが…。隣に横たわるFさんに訊ねた。

「箸の中国語は何でしたけ？」

Fさんも直ぐには思い出せなかったが、「筷子^注」だろうと教えてくれた。

さっそく「我忘了筷子」とメモした紙を、ガイドに見せたところ、あっさりと箸は無いと言われた。ガイドや食事賄いの人は、割り箸の予備を持ち歩いていると思ったが、当てが外れた。

箸の中国語を訊いたことで、私らが箸のないことを知ったFさんは、ご親切に予備のフォークを1つ貸してくれた。それは私が使うことにした。

ツレアイは指が細いので、「割り箸のような指をしている」と、友人にからかわれたことがあった。しかしこれは比喩で、箸の代わりにならない。なにか探さねば。

そこで、外の茂みから手頃な小枝を物色して箸を作ることにした。

ひねた枝が多く、良い形のものはないが、細い枯れ枝を2本選んだ。長さを揃え、ナイフで先端を尖らせて間に合わせの箸とした。ママゴトのようだが仕方がない。

5時頃夕食となった。隣の部屋が土間の炊事場兼食堂になっている。そこで旅行社の係りが食事を作った。食器を持って行くと湯気の立つおかず6品くらいをプラスチックの皿に入れ、台の上に並べてあった。先着順からおかずの前に並び、バイキング形式で自分の食器に入れる。おかずは意外にも保存



食事はバイク形式。野菜が新鮮でうまい。

食品ではなく、新鮮な野菜炒めなどであった。野菜や肉の食材はY社と契約した布農族の歩荷(山での荷物運び人)が麓の村からそのつど運ぶようだ。

炊事場には作業台のような机以外に椅子や食卓はなく、立ったまま食べるか、自分の寝床に持ち込んで座って食べる。食器と箸は自分で持参したものをを使う。

日本の山小屋だと、夕餉には缶ビールやカップ酒を飲み、山の自慢談義になるが、ここではアルコール類を飲む人は見かけなかった。山登りに来る若者台湾人は健康志向で、酒は不健康と考えるようだ。煙草を吸う人はいなかった。ガイドの1人(老虎)だけが時々すっているのを見た。

食事が済むと、何もすることがないので早々と寝る。支給された寝袋はかなり大きめの、持ち運びを想定しないカサの大きな廉価品だった。私とツレアイは防寒と、シーツを兼ねてシュラフカバー(寝袋の外側を覆う防寒防湿用の布袋)を持ってきた。本来は寝袋にかぶせて使うが、シーツも兼ねるので寝袋の内側に入れ込んで寝た。おかげで保温力が増してよく眠れた。

大阪のグループは、^も猛者^さなので寝袋だけで寝ていたが、寒かったそうだ。彼らの中に知恵者が居て、お湯を詰めたペットボトルを衣類で巻き、湯たんぽ代わりにした人もいた。温かくて具合が良かったそうだ。

隣のFさんは玉山と雪山での経験からか、かなりの防寒衣を持ち込んでいた。

寝る前にガイドが室内を巡回して、各人に明日の予定を告げる。翌日は1:30起床だという。Fさんがもう一度確認して、私たちに伝えてくれた。1:

30起床、2:00食事、2:30出発だそうだ。異常に早い出発のわけは、稜線で日の出を見るためと、往復20kmという長い行程のためだろう。

夜は雷雨となった。

◆いよいよ往復20km

ざわつく気配で、目覚めた。起床時刻である。ヘッドランプを点けたガイドが寝床を回って、寝ている人を起こしていた。かなり寒かったが、日本の冬山のように天井や窓に霜が付くことはない。室内で8℃くらいだろう。

寝袋をたたんで身支度をしていると、飲み物ができたからおいでなさいと呼ばれた。コップを持って炊事場に行くと、ヘッドランプに照らされた大鍋から湯気が盛んに上っていた。のぞき込むと得体の知れない黒い液体があり、これが飲み物だ。コップに注ぎ入れて飲むと生姜湯であった。モーニング珈琲ではなく、モーニング生姜湯が朝の飲み物だった。黒糖だろうか、優しい甘みがあり、体が温まってきた感じがいい。

大阪組の1人が、この生姜湯をポットに詰めて、山行中のお茶代わりに飲んだ。飲みすぎは良くないのだろうか？ 彼はお腹の具合が悪くなり、行動中に困ったことになってしまった。夜になっても苦しんでいた。しかし、登山は完歩した。

起きることは起きたが、体は夜中なので食欲は湧かない。ツレアイは、登山を始めてから食欲が無く、ほとんど食べなかった。

簡単な朝食が済むと、全員身支度をして外のテラスに集まった。ガイドの号令で屈伸運動、体ほぐし運動などをやった。いよいよ出発だ。 (続く)

注) 箸と筷子 中国には「南船北馬」という言葉があるように、長江から南の江南地方では人々の主な移動手段や商品の運搬手段は船でした。それだけに「箸(zhù)」という字は「(船が)止まる」という意味の「住(zhù)」と同じ発音なので、江南の人たちにとって、「箸」は紛らわしい文字だったのですね。

それで江南の人たちは洒落っ気を発揮して、止まるの意味の「住(zhù)」と正反対の意味をもつ「快速」の「快(kuai)」と呼ぶようになったのだそうです。そして宋が明の時代になってからは、「快」に竹冠をつけた「筷子」という文字が中国全土にも広まっていったのだとか。

(王俊英さんのブログから)

【映画】三姉妹 ～雲南の子 監督・王兵

2012年ベネチア国際映画祭オリゾンティ部門グランプリ
2012年ナント三大陸映画祭グランプリ & 観客賞ダブル受賞

映画はひと言でいえば美しかった。じっくりとカメラを据えて記録する幼い姉妹たちの姿はまるでカメラを意識せず自然で愛しかった。大自然の広がりや風の音を感じさせる。小さな窓の、薄暗い部屋で食事をする家族を逆光で撮影した映像はまるで一幅の宗教画を見るようだ。

撮影の王兵監督は、私は知らなかったが2003年、2007年と山形国際ドキュメンタリー映画祭でグランプリを獲得している。デジタルカメラを駆使したドキュメンタリー映画は国際的映画祭に出品され、高い評価を得、何度も受賞している。陝西省西安生まれのまだ40代の若い監督である。

映画は、実は極限の貧しさの、とてつもない過酷な現実の中で生きる幼い姉妹たちを映している。姉妹たちは健気でこそあれ、誰からの同情も求めてはいない。自分たちが誰かの同情を買う存在であるとも思っていないのだろう。私は姉妹たちがその過酷な現実の中にありながら子供本来の生命の輝きを放っているのに感動した。だから抱きしめたくなるほど愛しいのだ。そのような状況の子どもに何もしなくてよいという訳ではないが、子どもを困む環境全てが過酷であれば、子どもはその環境を受け入れて育つ力があるのだ。

子ども達の母親は何年前に家を出た。海拔3200mに位置する僅か80戸の家族が暮らすのは漢民族の村のようだ。その標高の高さから穀物は収穫できず唯一の食物はジャガイモだけだ。子供たちの父親は現金収入の道を求めて出稼ぎに行き、10歳の英英が母親代わりになって6歳と4歳の妹二人の面倒を見ている。着の身着のままの汚れきった服を着、破れた靴を履いてぬかるみを歩き、豚やヤギを追い、虱を取る。

姉妹たちは父親がいなくとも母親がいなくともそれが当たり前であるかのようで、いつも一緒に淋しがっているふうでもない。ある日父親が突然戻ってきた。姉妹たちが父親に見せる表情は心底嬉しそうだ。

父親が経済的理由で出稼ぎに行かざるを得ないことを幼いながら理解し、父親が出稼ぎに行っても姉妹たちを愛していると信じられるのだろう。父親が携えて来たウドンを齧る、貧しくとも幸せそうな家族の姿。

しかし父親は、経済的な理由から妹二人だけ連れて出稼ぎに戻ってしまう。一人残された英英は学校に通い、オバさんの家の山羊を追い、ジャガイモを茹でて一人で食べる。時に淋しさを感じてもそれが彼女の日々の生活だし、「泣いても誰も手を差し伸べてくれはしない」と知っている。

王兵監督は、ただひたすら姉妹たちの姿を追って、事実をありのままに撮影する。会話も少なくナレーションもない。全くの作為なしに姉妹たちや村人の

姿を記録し続け、この映画から何を感じるかは観客に任せているのだ。

2時間半という上映時間の間、感情的に押し付けられるものがないからこそ感動も深いのかもかもしれない。沢山の受賞が納得できた。(田井光枝)



‘わりい’は、毎年4月から新年度になります。ご継続をよろしく願います。尚、新年度の会費の納入は、なるべく早くお願いできれば有難いです。また、新入会を歓迎します。

年会費：1500円 入会金なし
郵便局振替口座：0180-5-134011 ‘わりい’

‘わりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等の開催など文化的交流を通して国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。また、2月と8月を除いて年10回、会報‘わりい’を発行し、情報の交換に努めています。入会されると

- ①年10回おたよりをお送りします。
 - ②‘わりい’の活動の全てに参加できます。
- 問合せ：042-734-5100 (事務局)

◆インターネット会員の制度もあります。アドレスを頂いた方に、毎月、カラーの美しい‘わりい’をpdfファイルでお送りします。こちらは無料です。

4月になって、やっと新学期が始まった。前にも書いたように、本来ならもっと早い時期に始まるのが、今年は昨年ストライキの影響で4月にずれ込んでしまったようだ。普通、日本ならば新学期は4月と決まっていますが、それ以前にどのようなことがあっても、新学期が大幅にずれ込むことはあり得ない(ただし、2011年の東日本大震災の折には被災地の多くの学校で遅れたことはあったが...)。しかし、スリランカではそれは実に鷹揚としているのか、のんびりとしているのか、全くフレキシブルである。

最初、新学期は3月に始まり、授業は8日から始まるとの連絡を受けたが、その後1週間ずれ、さらには2週間、そしてやっと4月になって開始された。教える者としては予定を組んだり、旅行に出かけたいと思っても、いつ始まるかわからないので、大変困惑した。その上、スリランカでは入学式や卒業式は特別ないようだ。いつの間にか卒業生はいなくなり、代わりに新生が入って来た。この大学は3年制なので、3年生は最後に授業が終わったら、試験を受け、数週間後に試験の結果を受け取り、それで終わりといった具合である。もしかしたら、教師と学生のお別れパーティみたいなものがあるかもしれないが、日本語科に関してはなかったと思う。

大学内で何人かの卒業生と偶然会った時、「今4年生なんですよ」とある学生が言った。「留年」(?)と一瞬思った。しかし、優秀な学生なのにそんなことはないはずと思いながら、詳しく尋ねてみると、そうではなく彼は自主的に残り、勉学を続けるのだそうだ。こういう学生が他にもいた。中には単位がとれず、仕方なく留年している学生もいると聞いたが、こういう面ではスリランカは厳しくし

ているようだ。

4月になると、キャンパス内が急ににぎやかになってきた。それは初々しい感じの新生があちこちに姿を見せ、大学案内を手にして、あちこち動き回っている。彼らは一見してすぐ新生だと分かる。

新生は最初にオリエンテーションがあり、授業の開始がすこし遅れたが、10日過ぎにようやく開始された。授業を開始して、もうひとつ驚いたことがある。それは新生が最初の授業では20人くらいだったのが、1週間後に5、6人増え、さらに次の週には6、7人、そして3週間後にはまた5、6人も増え、最終的には40人を越えてしまったこ



新生(右側女子学生)を上級生(左側男子学生)が学内の活動に参加を呼びかけている



新生が寸劇を披露している歓迎会でのシーン



日本語を学ぶ男子学生(右側の学生は日本への研修滞在の経験あり)

とである。

ばらばらに入ってくるので、進度の面で大変困ってしまいました。これはどういうことなのかスリランカ人の先生に尋ねると、入学してくる学生にはランクがあり、優秀な学生は4月最初に入り、順次成績次第で登録し、入学試験の点数はあまり良くないが、Aレベル段階で日本語能力の高い学生は最後に入ってきた、と説明してくれた。この説明でよく分かったが、それにしてもばらばらに来ると、授業が大変やりにくい。

今学期は6時間の授業担当だ。前学期は9時間だったが、少し負担を感じたので減らしてもらうように頼んでみた。その結果3時間少なくなった。他の日本人の先生方も2時間位少なくなり、その分を日本から1名教師が追加され、今学期は日本人の先生が4人となり、スリランカ人の先生と合わせて9人の体制となった。私は、1年生と3年生の「漢字」(各2時間)、そして、1年生と2年生の「日本文化」(各1時間)を担当している。

新入生はすでに2年間日本語は勉強してきているので、初歩的な平仮名、片仮名は一切やる必要はなく、もういきなり難しい漢字を勉強している。しかし、漢字は発音が同じでも文字が違うのが多く、音読み、訓読みの区別、書き順など教えるのがかなり大変である。最近ではもっぱらパソコンばかり利用してい

るので、あまり漢字を直接書くことがないせいか、急に思いだせない漢字が出て来ることがある。

2、3年生の授業が軌道に乗り、そろそろ学内でのサークル活動やいろいろなイベントが始まる頃である。5月になって、12日に新入生歓迎会が開かれた。これは2、3年生が主催して、1年生を歓迎する集まりであるが、教員も招かれて参加した。本来は授業に出るだけで精一杯の新入生に少しでも大学の楽しさや勉強のことなどをアドバイスしようと企画したものである。しかし、新入生歓迎会なので、

このような堅く正しいことはさておいて、この日は大いに楽しもうという魂胆であった。上級生はいろいろ考えた末に、1年生に寸劇をグループ毎に披露させ、日ごろ大人しい彼らに大いに羽目を外し、楽しんでもらおうとするものであった。新入生を6つのグループに分け、それぞれ時間を与えて、5～6分の寸劇をさせ、優秀なグループには賞品を与えた。もちろん大いに沸いたことは言うまでもない。私たち教員も大いに楽しんだ。

5月末には仏教の大きな行事であるウェサック祭りが国中で祝われ、これが終わるともう6月である。あっと言う間に時間が経ち、私がスリランカに来て半分以上が過ぎた。

これからも大学での様子や旅行に出かけたことなどレポートしていきたいと思う。 (続く)



ダーナ(お布施)を受けるために僧侶達が食堂へ向かう

グラモダヤ民族芸術センターは、スリランカに古くからある伝統芸術を若い世代に後継させる事を目的として1988年に設立されたスリランカでは新しい施設です。

何故、今回このセンターを取り上げたかという、僕がスリランカとの関わりを深める事になった原因の一つに関係があるからです。それは何かというと、スリランカから帰任して2年ほどがたち、スリランカ熱も少し覚めてきた頃の事でした。何かの折に立ち寄った本屋で、アジアの手織りの布と染織に関する本を見つけました。マレーシアに滞在していた時にバティック(ろうけつ染め)の美しさに魅せられ、アジア各国を歩き回るうちにバティックを含めて手織り布に興味を持つようになっていたので、この本のタイトルが目に入ってきました。1998年発刊で値段は3500円と結構立派な本でした。

パラパラと本をめくってみると綺麗な写真がたくさん使われています。当然スリランカに関するページがあるだろうと、索引を見てみると載っていないじゃありませんか。インドやインドネシア、タイはあって当然だとは思いましたが、その頃はあまり知られていなかったブータンやミャンマーの手織り布が紹介されているのに、なんでスリランカがないの？ 載っていたアジア全体の地図では、スリランカはインドと陸続きの様に見えるし、アジア南部の地図にはスリランカそのものが載っていません。

それでも写真の美しさに魅かれてその本を購入し、家に帰って詳しく読んでみると、アジアそれぞれの国の手織りの布と染織を研究している人達の共著である事が判りました。つまりスリランカには手織りの布と染織が存在しないのか、スリランカの手織りの布と染織を研究している人がいないのか、又はこの本の作成に参加していない事が判ったのです。これからだいぶ後になって、日本スリランカ文化交流協会に加入させて頂き会の設立者・会長であり、わんりいの会員でもある為我井氏がスリランカバティックの第一人者である事を知る事になります。

この本にスリランカの手織りの布が記載されていな

い事に驚き、スリランカに滞在していた頃を思い出してみました。すると、コロンボにある政府公認の御土産物屋にも、世界遺産に登録されている様な遺跡にある御土産物屋にもバティック製品はありましたが、手織りの布で出来た製品を見た事が無いのに気が付きました。国立博物館でも小さな端切れしかなかったと記憶しています。

この本を購入してから約2年後に退職し、何をするかを具体的に決めていたのですが、1年間は充電期間と考えて好きな事をしてやろうと考えていました。退職しようと考えていた時から、退職後の充電期間中に行うプランの一つとして、スリランカに古い手織りの布を探しに行こうと考えていました。

当時、僕が理解していたスリランカの歴史上の文化では紀元前からシンハラ王朝が存在し、それに伴って豪華絢爛な文化が存在していた事。シーギリヤレディースと呼ばれる、シーギリヤロックの岩肌に残されているフレスコ画の美女達が身に纏っている衣装、キャンディで古くから行われているペラヘラ祭りでシンハラ王朝の王族や貴族達が身に纏っている衣装は、機械化されていない頃からの伝統的な衣装ですから、手織りの布を使った衣装であった事は間違い無いと思います。ヨーロッパや中近東と古くから交易していたので、これらの国に交易品として手織りの布が渡って博物館にでも残されていないかとも思います。

僕がスリランカ滞在中には家族はロンドンに住んで居たので、大英博物館にも何度も行っていたのですが、その頃はエジプトやメソポタミア、インダス文化ばかり見ていて、スリランカの手織りの布を探すという気持ちが無かったので、かすかな記憶として小さな布きれを見たかな？という程度です。今思えばなんでちゃんと見なかったと思うのですが、スリランカに今の様に深く関わりを持つようになるとは思っていなかったから仕方ありません。そのうちに暇が出来たら確認しに行こうと思っています。

前置きが長くなりましたがグラモダヤ民族芸術センターを紹介しましょう。前述したように1988年に設

立された、伝統芸術を若い世代に後継させる事を目的とした施設です。法律上の首都であるスリージャヤワルダナプラの国会議事堂の傍にあります。

センターではレース編み、宝石加工、木工、金属加工などの技術的な物の他、伝統楽器演奏や伝統舞踊を含めて11のクラスがあり、この中には織物のクラスも含まれています。生徒たちはスリランカ全土から集められ敷地内の寮で、合宿形式で技術の習得に励んで

います。グラモダヤ民族芸術センターの職員の方に古い手織り布の話聞いて、手織り布探しの旅が始まりました。 (続く)



グラモダヤ民族芸術センターの織物クラス風景

中国の笑い話 IX (「365夜笑話」より)

第25話：飴とパンフレット

おばさんが、キャンディーを持って、二人の姪のところへ遊びに来た。おばさんが席に着くなり、7歳になる上の姪が、歯医者さんから貰ってきたパンフレットをおばさんに見せた。

そこには、様々な歯に悪い食べ物が紹介されていて、中にキャンディーも入っていた。それを見たおばさんは「このパンフレットを見るとキャンディーは食べてはいけない食べものだから、残念だけど、持ってきたキャンディーは持って帰るしかないわね」と言った。

姪は、慌てて言った。「おばさん、大丈夫よ。キャンディーは妹に上げて。妹は未だこのパンフレットを貰っていないから」

第26話：そんなに長くは待てない

母親が部屋に入ってきて、二人の娘に昼食の準備を手伝うように言いつけた。そのとき、姉のナターシャはアフリカに関する本を読んでいるところで、妹のジュリアは人形で遊んでいた。

ジュリアは母親に呼ばれるとすぐに台所へ

行った。暫くすると、部屋に戻って来て、ナターシャも台所へ行って母親を手伝うようにと伝言した。

ナターシャは言った。

「私は今家にいないの。私はアフリカにいるのよ。そこでは、棕櫚の木の花が満開で、綺麗なオウムが自由に飛びまわっているのよ」

ジュリアはまた台所へ行った。暫くして戻ってくると、また人形と遊び始めた。ナターシャは、妹が何かを食べているのを見て訊いた。

「何を食べているの？」

ジュリアは答えて言った。

「アイスクリームを食べているの。これは2個目なのよ。さっき食べたのが私の分だったの」

ナターシャが言った。

「どうして私の分を食べてしまったのよ！」

ジュリアが答えた。

「お母さんが、お姉さんはいつアフリカから帰ってくるか分からないし、アイスクリームは時間が経つと溶けてしまうから、私が食べて良いと言ったのよ」

(翻訳：有為楠君代)

サハ共和国・ヤクーツクだより ②

杉嶋俊夫

ヤクーツクに来て早くも2か月経ちました。雪もようやく解け、待ちに待った春がやってきました。といっても5月はまだ気温の変化が激しく、上旬に17度まで上がったと思ったら、下旬現在の気温は6度。まだ、本当に春がきたという気はしません。今回はサハを代表する楽器を中心に少しお話ししたいと思います。

■ “口琴王国”サハ

みなさん、口琴（こうきん）という楽器をご存知でしょうか。長さ10cm前後の、口にあてたまま指で弾いて演奏する楽器です。世界中の民族に伝わっており、日本でも江戸時代には「びやぼん」と呼ばれ大流行したそうです。アイヌ文化にはムックリという竹製口琴があり、今でも演奏する人々がいます。

先月のヤクーツクだよりの冒頭で田井さんも触れていただきましたが、サハ共和国ではホムズという名の金属製口琴が民族楽器として受け継がれています。ヤクーツク市内には世界諸民族ホムズ（口琴）博物館や、様々なホムズ演奏アンサンブルがあり、女性トリオ AYARKHAAN は世界的に活躍しています。

■ サハの“ゆたかさ”

民族音楽愛好家の間ではサハといったらホムズというくらい有名な楽器ですが、サハは音楽活動そのものが大変活発です。春は毎日のように市内のどこかで様々なジャンルのコンサートが開かれており、ポップミュージックはロシアのものとサ



Lena river ヤクーツク市の北を流れるレナ川は、氷が毎年5月中旬に割れます。外国人留学生らと一緒に見に行ったのですが、“流”氷は見られず少々期待外れでした…。



ホムズ（口琴）練習風景 子どもセンターでは、歌・ダンス・刺繍など様々な講座が開かれています。そのひとつ、ホムズ教室を見学させていただきました。

ハのものが共存しています。さらに音楽以外の分野に目を向けてみると、ダンス、バレエ、オペラ、演劇、美術、スポーツ活動などが町の人々にとってかなり身近なものであることに気づきます。そして、ホムズが発達した背景には高度な鍛造技術もあります。こうした“ゆたかさ”が厳しい自然環境の中での暮らしを支えてきたのかなと感じます。



子ども芸能コンテストに集まった子ども達 休日に市内の子どもセンターを覗いてみたら、ちょうど全共和国子ども芸能コンテストが開かれていました。優勝したのは日本の踊りを少しミックスした、地方から参加したグループでした。



サハ文化の夕べ 市の外れにある施設で「サハ文化の夕べ」が催されたが、その催しが終了すると同時に若者が歌いだし、どんどん人が集まってきて踊りの輪ができました。

杉嶋俊夫 略歴：東京都町田市生まれ。千葉大学卒。大学で認知心理学を専攻、途中で言語学に転向、シベリア先住民の言語を学ぶ。院在籍時に西シベリア・トムスクの大学に留学したことがきっかけで、トムスク市やロシア西部・リャザン市にある大学で日本語を教える。今回の派遣も、リャザン大学の時と同じ日露青年交流センターの派遣プログラムによる。

サハ共和国：日本(約38万km²)のおよそ8倍の広さに相当する国土を持ち、全て永久凍土で、面積の40%は北極圏に含まれる。針葉樹林帯(タイガ)がサハ共和国の47%を覆う。サハ南部には炭鉱地帯があり、東部は金が豊富である。

山がちな国土なため、冬の寒さは極限に達する。南極を除くと世界最低気温となる氷点下71.2度を1926年1月に記録したオイミヤコンや、やはり冬の酷寒で知られるベルホヤンスクもあり、北半球の極寒地と考えられているが、雪は少ない。

1月の平均気温は北極海沿岸でマイナス28度、その他の内陸部ではマイナス50度に達する。7月の平均気温は北極海沿岸ではわずか2度、一方内陸部では19度にまで上がり、特に内陸盆地ではしばしば猛暑となる。

サハ人は13世紀に中央アジアからこの地に進出したトルコ系民族でモンゴル系とも混血しており、もともとこの地にいた狩猟採取民族を征服し同化した。



(ウィキペディア フリー百科事典抜粋)

【‘わりい’の原稿を募集しています】

‘わりい’は、2月と8月を除く毎月発行の当会の会報です。主として、会員と会の関係者の皆さんの原稿でまとめられます。海外旅行で体験された楽しい話、アジア各地の情報やアジア各地で見聞した面白い話などを気軽にお寄せ下さい。

又‘わりい’の活動についてのご希望やご意見及び‘わりい’に掲載の記事などについても、簡単なご感想をお寄せいただければと存じます。

日中文化交流市民サークル‘わりい’

使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を！

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、使用済み古切手と書き損じの葉書を集めています。古切手は周りを1cmほど残して切り取り、おついで折に‘わりい’の事務局にお届けくださるか、田井にお渡し下さい。

◆わんりいの催し

中国語で読む・漢詩の会

よく知られている漢詩を、中国語の音とリズムで楽しもう！
正しい発音で読めるように練習しよう！漢詩の時代的背景
や詩に描かれている情景を知って漢詩を一層楽しもう！

- ▲場所：まちだ中央公民館
 - ▲月日：6月の講座 6月9日(日)8F 学習室7
7月の講座 7月7日(日)6F 学習室3・4
 - ▲時間：10：00～11：30
 - ▲講師：植田渥雄先生
(現桜美林大学孔子学院講師)
 - ▲会費：1500円(会場使用料・講師謝礼など)
 - ▲定員：20名(原則として)
- *録音機をお持ちの方はご持参下さい。



◆申込み：☎050-1531-8622(わんりい)
E-mail: ukiuki65@yahoo.co.jp

◆わんりいの催し

ボイストレーニングをして日本の歌を美しく歌おう！

- ◆動きやすい服装でご参加ください
 - ▲場所：まちだ中央公民館・6F視聴覚室
 - ▲月日：6月18日(火)・7月30日(火)
 - ▲時間：10:00～11:30
 - ▲6月の練習歌「雨降りお月さん」
7月の練習歌「川の流れるように」
 - ▲講師：Emme(歌手)
 - ▲会費：1500円(会場使用料・講師謝礼など)
 - ▲定員：15名(原則として)
- 申込み：わんりい ☎042-734-5100
E-mail：wanli@jcom.home.ne.jp



第8回「弦之縁」

小青フレンドリーコンサート

中国の伝統曲のほか、姜小青のニューアルバム収録
のオリジナル曲を中心に演奏

出演：姜小青(古箏)、西本梨江(ピアノ)
ゲスト：涂善祥(中国琵琶)

2013年6月14日(金)18：30開演
めぐろパーシモンホール・小ホール
(東京都目黒区八雲 1-1-1)

- 参加費：4,000円(当日/4,500円) 全席自由
 - 問合せ&申込：☎080-1304-7347(村山)
FAX：045-313-5188
E-MAIL：xianzhiyuan_hz@ybb.ne.jp
- 主催：姜小青フレンドリーコンサート実行委員会

男女共同参画週間記念講演

「アニャンゴの夢をつかむ法則」

現地でも限られた男性だけに演奏が許され
たニャティティ(ケニアの伝統楽器)に魅せ
られ、単身ケニアへ押しかけ修行！無理だ
と思ったら何もできない。
世界初の女性ニャティティ奏者であり、
2009年7月、「ニューズ
ウィーク」誌の「世界が尊敬
する日本人100人」に選ば
れたアニャンゴ*さんに、夢
を追うことの素晴らしさを
お話いただきます。



(* Anyangoとはルオ語で、「午前中に生まれた女
の子」という意味)

▲町田市民フォーラム・3Fホール

小田急線町田駅東口徒歩8分/JR横浜線町田駅
ターミナル口徒歩5分)

▲2013年6月14日(金曜日)

▲14：00開演(13：40開場)

▲主催：町田市(担当課市民部 市民協働推進課)

☀申込み：042-724-5656(町田市イベントダイヤル)

【6月の定例会と7月号のおたより発送日】

- ◆定例会：6月13日(木) 13：30～田井宅
- ◆7月号のおたより発行日：7月1日(月)
三輪センター 午前印刷/午後発送準備

‘わんりい’ 184号の主な目次

京雑感(75)公共交通機関(バス)	2
諺・慣用句(20)「治において乱を忘れず」	3
媛媛讲故事(54)「花好き翁IV」	4
【智子の雑記帳】93「五月病になりました」	5
中国・城市めぐり(25)「紹興市そのⅢ」	6
日本探検記③ バスの中にて中国講座	9
台湾登山ツアー体験③ 向陽山の山小屋へ	10
【映画】三姉妹～雲南の子	13
スリランカ・ケニアだより④新学期がやっと開始	14
スリランカ紹介(68)グラモダヤ民族芸術センター	16
中国の笑い話Ⅷ	17
サハ共和国・ヤクーツクだより②	18
‘わんりい’ 掲示板	20